UDLM

2

vol.355

Feb 28th
2025

それぞれの集大成

△卒業制作の作業場所になっていた演習室

p.3-4 博士論文
p.5-12 修士論文
p.13-14 卒業論文
p.15-18 卒業設計
p.19 MEMORIES

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

博士 / 修士論文
卒業論文
卒業制作
2025

D-2名 / M2-8名 / B4-6名

東京大学大学院　都市デザイン研究室

成蹊学園取得地（武蔵野市）・
自由学園取得地（東久留米市・西東京市）

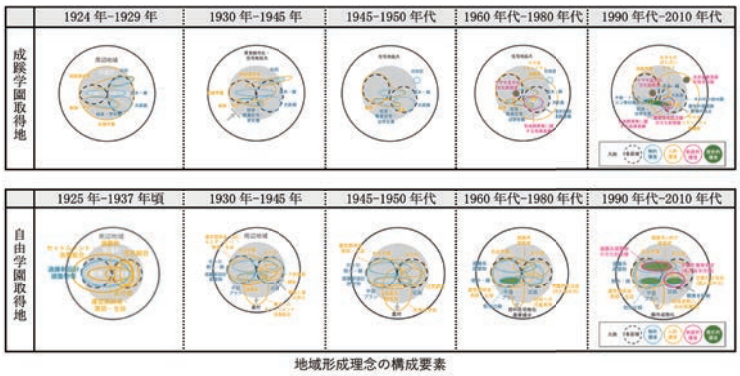
教育運動型学園町の地域形成理念と歴史的環境保全

- 大正新教育実践校を中心とした地域を対象として -

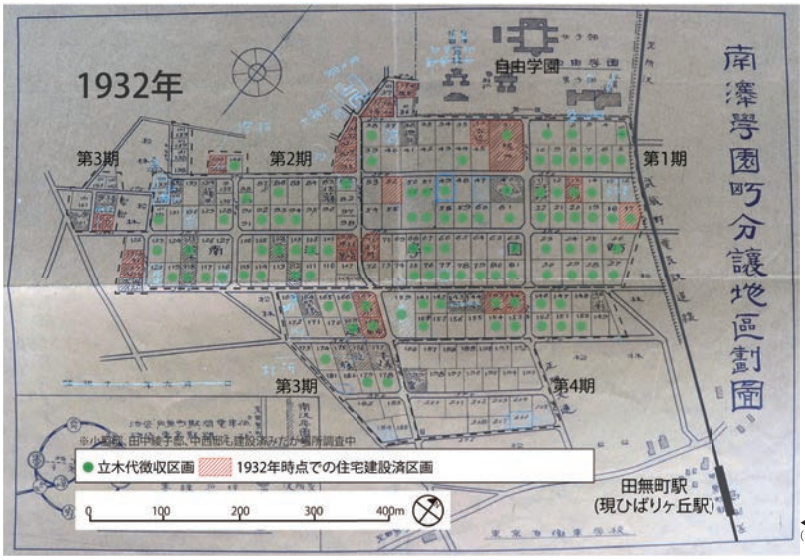
D・玄田　悠大
げんだ　ゆうた

執筆データ

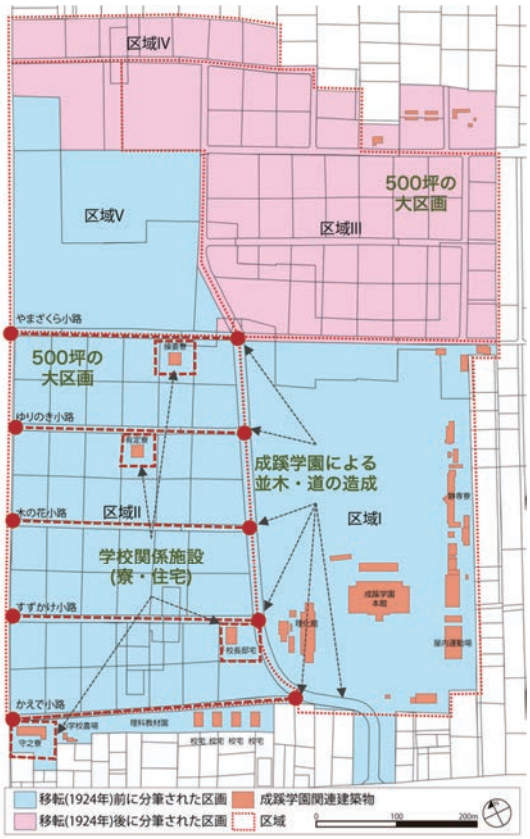
文字数	544 ページ
執筆環境	word
キーワード	歴史的環境保全 / 学園町 / 新教育運動 / 田園都市運動 / 地域形成理念



地域形成理念の構成要素



◀南澤学園町の立木代発生区画及び住宅建設済区画（1932(昭和 7) 年時点）
（南澤学園町分譲地区画図（婦人之友社蔵）より筆者作成）



▲成蹊学園取得地の土地分割図（1927（昭和 2）年頃）（旧旧公図（東京法務局府中支局蔵）、旧土地台帳（東京法務局府中支局蔵）、上田祥士監修 - 成蹊 100 年の歩み , 成蹊学園 , 2012, p.57 より筆者作成。成蹊学園関連建築物は上記文献より推察しており、1933（昭和 8）年頃までに建設されたものを一部含む可能性）

研究の概要　本研究は、近代以降に形成された地域の歴史的環境保全への示唆を得ることを目的に、地域形成に資する理念である「地域形成理念」の形成・展開に着目し、初期民間開発型郊外住宅地の一類型である教育運動型学園町、特に成蹊学園及び自由学園の取得地を対象に、その地域形成理念の形成と展開、そして歴史的環境保全について分析したものである。構成は、序章ののち、第 1 部で教育運動型学園町の開発背景を欧米及び日本の新教育運動・田園都市運動に着目してまとめ、第 2 部で成蹊学園取得地を、第 3 部で自由学園取得地を対象としてその地域形成理念と歴史的環境保全を分析し、結章でまとめと考察を行った。その際、地域形成理念の範囲を物的環境、人的環境、制度的環境と位置付け分析した。結果、地域形成理念が物的環境だけでなく人的環境や制度的環境も含めて相互連関しつつ継承され、その過程で段階的に歴史的環境保全の動きが生じていくことが明らかとなった。同手法を用いることで、当該地域を含めた様々な地域の歴史的環境保全が期待される。

テーマ選定背景　歴史的価値の同定に至っていない状況が散見される近代以降に形成された都市や地域、近現代建築に関わる機会がこれまで多々あったのだが、2018 年 3 月に海外駐在から帰国した折、改めてそれらの魅力・歴史性を再認識する一方、その良好な環境が日々消失・解体されていることを目の当たりにし、歴史的価値が未認知である段階から、いかに継承する方策を取るかが重要であるとの認識に達し、研究対象とするに至った。

苦労した点　本論で設定した概念「地域形成理念」とその構成範囲である物的環境・人的環境・制度的環境の定義づけ及び手法論については、地域住民による活用も視野に置いたことから、その確立に非常に時間を要した。

今後の展望　本論を机上の空論とせず、各地域の歴史的環境保全に関する活動に結びつけること、国内外に研究・活動を展開させること、研究・活動を広く共有することで、知見とネットワークを広げていくことにつなげたい。

M1 へのアドバイス　仕事しつつ執筆したため、気を抜くと研究時間が無い状況でした。そのため、以下 3 点を意識しました。①隙間時間を活用すること（通勤時、昼食時、業後等）、②毎回のゼミ発表や学会大会投稿を自分に義務化すること、③本論が社会に必要な研究という自信を持って取り組むこと。加え、研究室の仲間と勇気付け合い、切磋琢磨しながら執筆できる環境は何者にも代え難いものです。皆さんが充実した研究活動をされることを願っています。

メッセージ　中島　直人
都市デザイン研究室 教授

600 頁に迫ろうかというこの論文。たった一つのことを探究する、その迫力。近代都市計画史においてこれまで検討が殆どなされてこなかった新教育運動と田園都市運動、地域開発との関係を、成蹊学園の吉祥寺、自由学園の南沢という具体的な地域を対象として詳細に明らかにしただけでなく、地域形成理念という概念の導入が歴史的環境保全の視野を確実に拡げてくれた。

中国浙江省寧波市

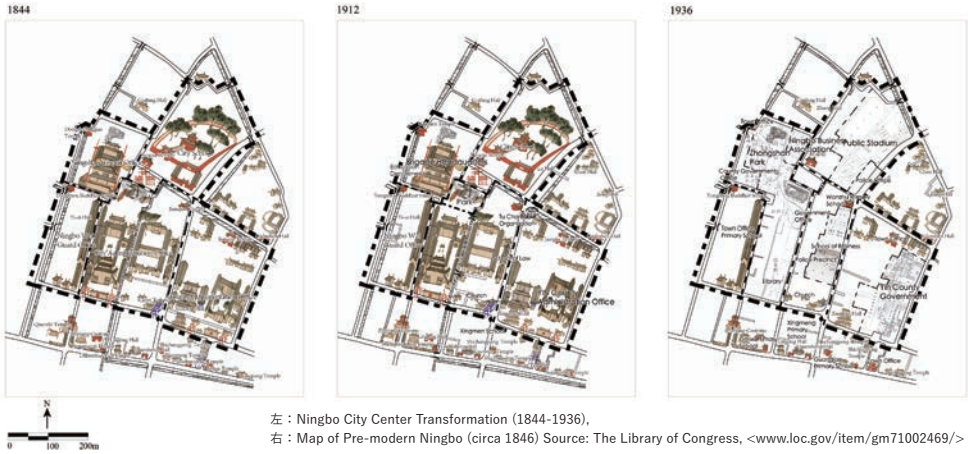
寧波における都市形態の変容（1844-1936）

：伝統的形態の近代化と継承の緊張関係に着目して

D・JIN Panpan
ジン パンパン

執筆データ

文字数　48,393words（185 ページ）
執筆環境　word
キーワード　都市形態 / 近代化 / 変容 / 継承



左：Ningbo City Center Transformation (1844-1936),
右：Map of Pre-modern Ningbo (circa 1846) Source: The Library of Congress, <www.loc.gov/item/gm71002469/>

研究の概要　This thesis investigates the urban morphological evolution of Ningbo, focusing on the tensions between modernization and the continuation of traditional urban forms. It aims to address the need for a systematic framework to study Chinese urban morphology, not only overcoming the challenges posed by limited historical records but also critically reassessing the applicability of Western morphological theories in the Chinese urban context. Through a combination of historical data collection, morphological analysis, and mixed-methods approaches, this study develops an analytical framework suited to understanding urban spatial transformation in Chinese cities during modern era.

The research begins by a systematical reconstruction of Ningbo's historical urban form, drawing from primary sources such as maps, local chronicles, and newspapers, supplemented by secondary research. Key morphological elements defining the city's spatial structure are identified, laying the foundation for periodization. The study delineates two key morphological periods based on critical historical events and quantitative analysis of street systems, mapping the dynamics of spatial transformation in response to socio-political and cultural shifts. Historical maps are corrected and supplemented using modern cartographic data, enabling an accurate representation of urban change at both city-wide as well as district and building scales. The integration of qualitative historical narratives with quantitative spatial analysis (via DepthmapX) provides a multidimensional perspective on Ningbo's evolving urban structure.

The findings reveal that Ningbo's morphological evolution is characterized by the coexistence of traditional spatial structures and modern interventions, forming a hybridized urban landscape rather than a complete rupture. Key features of pre-modern Ningbo, organic street networks, culturally embedded public places (public buildings and outdoor spaces), demonstrated resilience despite modernization pressures. Unlike the rigid zoning and geometric planning found in Western cities, Ningbo's transformation followed a pattern of negotiated adaptation, where local agency played a decisive role in shaping modern urban functions while maintaining historical spatial logic. This study further critiques the limitations of Western-centric urban theories when applied to Chinese contexts, emphasizing the necessity of a localized framework that accommodates both traditional Chinese urban elements and modern planning paradigms.

Ultimately, this thesis makes two key contributions to urban morphology. First, it demonstrates how Chinese cities, exemplified by Ningbo, navigated modernization while preserving key spatial structures, challenging the narrative of abrupt Westernization. Second, it underscores the importance of adapting foreign morphological theories to local historical contexts, ensuring that analytical frameworks reflect the unique socio-spatial logic of Chinese cities. By weaving these insights together, the study offers a nuanced understanding of how historical continuity and urban transformation coexist. The findings provide practical implications for urban planners, emphasizing the need for a balanced approach that integrates historical spatial logic into contemporary urban development. Future research should refine micro-scale morphological analysis through architectural typologies and land-use data, while expanding comparative studies between Ningbo and other Chinese port cities.

テーマ選定理由　Cities have always been a fascinating and enchanting entity to me. Whether it is the hybridity of Tokyo, the fluidity of Hangzhou, or the gentle charm of Ningbo—please allow me to describe them in this way, as I know that no words can truly capture their essence. This deep fascination has led me to dedicate the past ten years of my academic journey to the field of urban planning, from undergraduate studies to my doctoral research. My decision to focus on Ningbo in this dissertation was driven by both academic and personal reasons. On the one hand, it provided a compelling case for my research; on the other hand, it is the city where I spent the first 18 years of my life before entering university. I have witnessed its expansion and reconstruction, appreciated its emerging beauty, and at the same time, worried about the loss of its historical form.

得た学び　都市の空間近代化（変容した要素や継承された要素）について、より深い理解を得ることができ、また、その背後にある複雑な関係者の動きも把握しました。これらの学びは、今後の比較研究を進める際の出発点となるでしょう。

メッセージ　**中島　直人**
都市デザイン研究室 教授

3 年半の間、一つの都市に実直に向き合い続けることで初めて得られた貴重な成果。第一に中国の都市形態の変容は、伝統と近代化の相克と交渉を伴う過程であるという新たな視座の提供。第二に都市形態学を中国都市の独自の歴史的文脈に適応するかたちで展開させる方法の具体的実践。これからこの知見を都市計画や都市デザインの現場と接続できるか、JIN さんの挑戦に期待する。

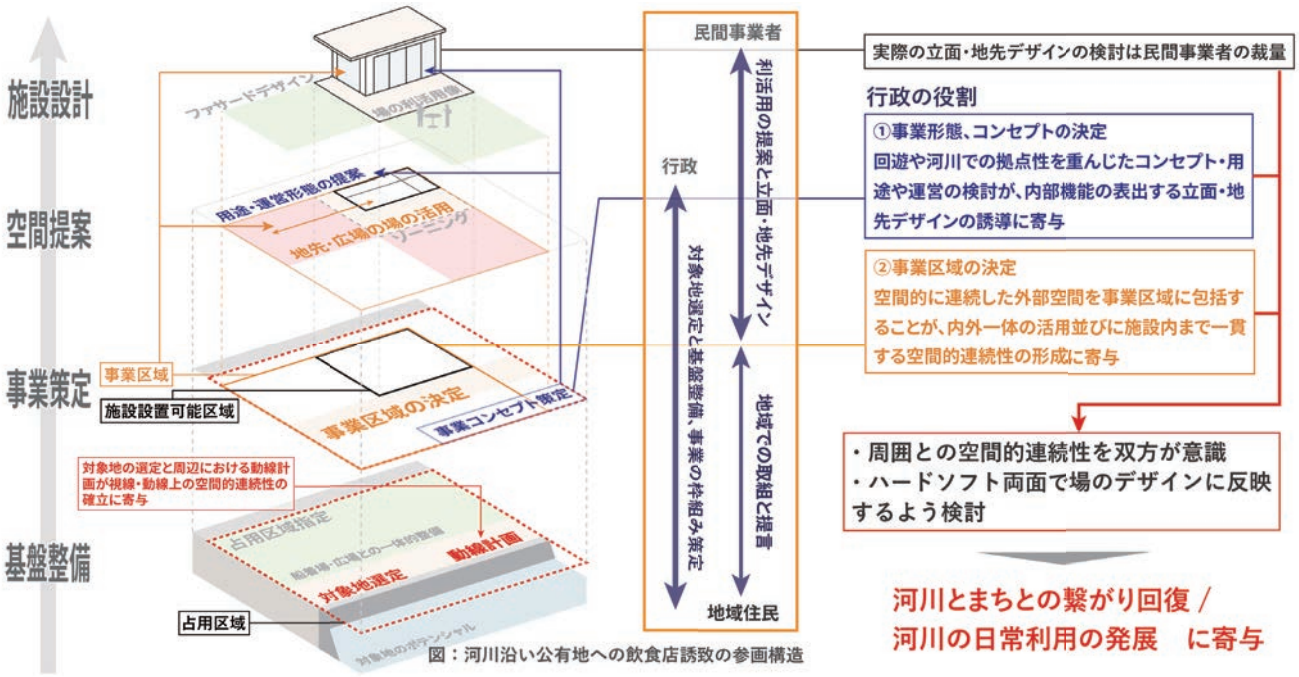
全国（ケーススタディとして大阪府大阪市）

河川沿い公有地の占用を伴う飲食店の立地形態と立面・地先のデザイン - 周囲との空間的連続性に着目して -

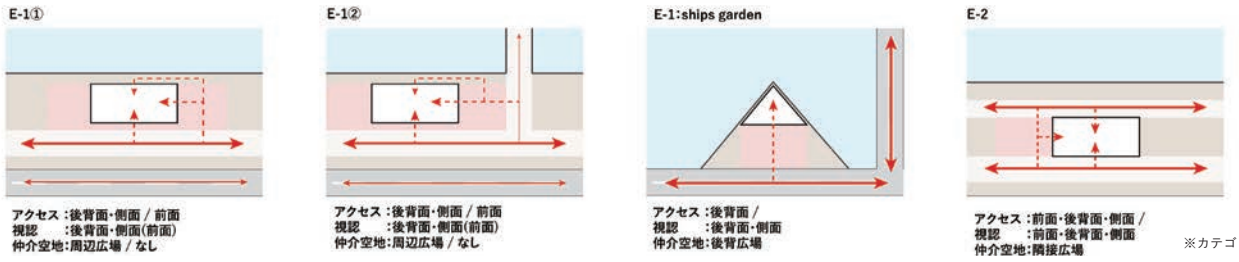
M2・音山　尚大
おとやま　なおひろ

執筆データ

文字数	約 130,000 文字（186 ページ）
執筆環境	google docs, indesign, illustrator, rhinoceros
キーワード	河川空間活用 / 飲食店 / 占用許可 / 空間デザイン



図：河川沿い公有地への飲食店誘致の参画構造



※カテゴリーから一部抜粋

研究の概要　本研究は、河川沿いの公有地の占用を伴う飲食店を対象に、立地形態と立面・地先のデザインの傾向を把握・分類・考察したものである。

近年、河川と都市との繋がり回復を目的に、河川空間に民間活力によって飲食店を整備して利活用する潮流が全国的に見られる。

こうした飲食店整備において、周辺市街地との繋がりは実態の上でも担保されているかを明らかにするために、全国の河川沿い公有地に立地する飲食店を対象に、視線・動線上での連続性の有無とそれに対する店舗立面・地先のデザインの応答のあり方の 2 つに着目して調査分析を行った。結果として、周囲との接続の有無は遊歩道や橋、堤防など空間要素との関係によって傾向づけられ、特に橋詰部は市街地と河川を仲介する場として重要であるとの示唆が得られた。また立面・地先のデザインについて、運営形態のほか事業者が利活用可能な区域の範囲によって上記の接続へのデザイン上の呼応の程度が決定づけられることが明らかとなった。

テーマ選定背景　卒制と同じ源流になりますが、小さい頃の地元の水路での遊びや総合学習から水辺空間のデザインへの興味を抱いていました。修論も卒制と同じく地元の水路をテーマに書こうとしましたが空間的余地や利用実態から研究として成立することに限界を感じたため、河川の領域に切り替えた経緯があります。近年の占用という河川をまちの文脈でデザインする潮流に関して、「その空間整備、デザインは本当に適しているのか？」という問題意識を常に考えていました。

苦労した点　既に沢山の既往研究がある領域であり、研究の位置付けに最も苦労しました。また分析にあたっても河川空間のどこに着目するのか、あるいは人の行動も調査を行うかなど対象と手法についてもずっと苦悩しました。

今後の展望　修士研究を通して培った思考のプロセスの他、資料作成やプレゼンの方法など総合的な技術を活かしたいと思います。またもし実務にて水辺空間を扱う機会があった際は知識面も活用できたら何よりです。

M1 へのアドバイス　研究は設計・制作以上に普段からの調査や作業が大事だなという実感を得ました。テーマや目的が全然決まっていない時でも、レビューや計画面の調査などできるところからコツコツ行い記録に残してたことが、提出直前の時期に生きたのかなと思いました。特に自分は直前での追い込みが苦手なタイプなので助かりました。

なので研究室会議での発表はチェックポイントと思ってしっかり準備するのをオススメします … ！

メッセージ　永野　真義
都市デザイン研究室 助教

ブレなかったテーマ、色んなソフトを駆使して繰り出す図の手数、最終的には 40 事例を網羅的にカテゴライズする力技で、数多の水辺研究を覆っていかんとする迫力ある研究となった。一方、事例を超えていく事例を生み出すポイントは、立面・地先だけではないように感じたのも事実。音山さん自身が今後、水辺での実践のチャンスにめぐりあい、そのブレイクスルーに挑んでくれることを願っています。

「昭和 62 年度 手づくり郷土賞 いきいきとした楽しい街並み 30 選」
受賞作品より 19 作品

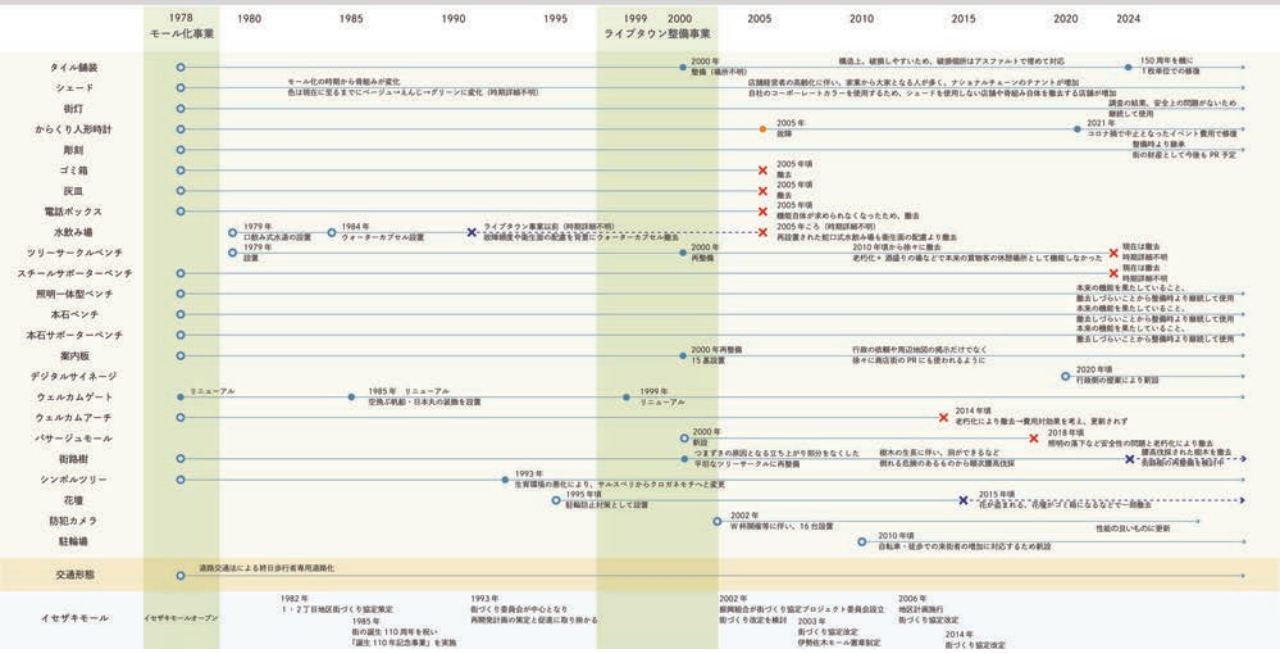
商店街景観整備事業によって生み出された街路デザインの継承・更新に関する研究 - まちの個性としての定着に向けて -

M2・小林　夏月
こばやし　なつき

執筆データ

文字数	約 52,000 文字（133 ページ）
執筆環境	word, illustrator, excel
キーワード	商店街 / 手づくり郷土賞 / イセザキ・モール

イセザキ・モールの街路デザインの変遷とその背景



手づくり郷土賞受賞時のイセザキ・モール
「精選手づくり郷土賞 part2 (並木道、風物詩、街並み)」

現在のイセザキ・モール

研究の概要　「街路空間の意匠・設備およびそのコンセプトとビジョン」を「街路デザイン」と定義し、1970~1980 年代に景観整備事業が行われた商店街について街路デザインの変化やその要因について研究しました。まず、「昭和 62 年度手づくり郷土賞」受賞作品から 19 の商店街を選定し、文献調査、Google ストリートビューを用いた調査より、整備事業実施時と現況を比較し、街路デザインの変化を整理しました。また、住宅地図を用いて街路デザインの変化と空間特性の変化との関係を分析しました。次に、街路デザインに更新および継承が見られる事例として、19 作品の中からイセザキ・モールを抽出し、文献調査、ヒアリング調査等より、整備計画期から現在までの街路デザインの変遷を辿り、継承・更新された要素とその背景について整理しました。調査分析より、景観整備事業の計画時のコンセプトや商店街組織の維持が街路デザインの継承と関係していること、整備内容自体の特性が街路デザインの変化につながっていることが明らかになりました。

テーマ選定背景　原体験は通学路として小学校から大学までほぼ毎日歩いていた地元の商店街の街並みが少しずつ変わり、その変化に面白さともの悲しさを感じていたことで、大学院入学後、修士研究では景観について取り扱いたいと漠然と考えるようになりました。テーマやコンセプトに基づいた個性的な景観創出に興味をもったものの、M1 の時はなかなか研究テーマがまとまらず、昨年 5 月の中島先生との相談を経て商店街の街路デザインの変遷に着目したテーマに決めました。

苦労した点　昔の資料がなかなか見つからず、大変でした…またイセザキ・モールのケーススタディに加えて、衰退がみられる商店街など他の事例の街路デザインの変遷も取り上げることができればよかったと思います。

今後の展望　ケーススタディより、事業に携わった方々の想いの継承・共有が街並みにも表れていると感じました。また、発表では伝えることの難しさを痛感しました。常に自分を客観視することを今後も意識したいと思います。

M1 へのアドバイス

私は本論を書き進める段階で研究の骨格を再認識し、分析したいことや追加で調査したいことがたくさんでてきました。M 1 の時から、研究の視点や目的と調査・分析を行き来しながら進めていけると良いと思います！

メッセージ　　中島　直人
都市デザイン研究室 教授

（一見すると）歴史的な意匠や文脈に依拠せずに新たに創出された景観への関心を 2 年間持ち続け、最後、イセザキモールの事例によって論がしっかりした像を結んだように思う。結論では商店街整備のビジョンやコンセプトを継承するツール（制度）の有用性が指摘されたが、ツールを生み出すのもやはりビジョンやコンセプトの内容であって、そこに地域の人たちと協働する私たちの仕事がある。

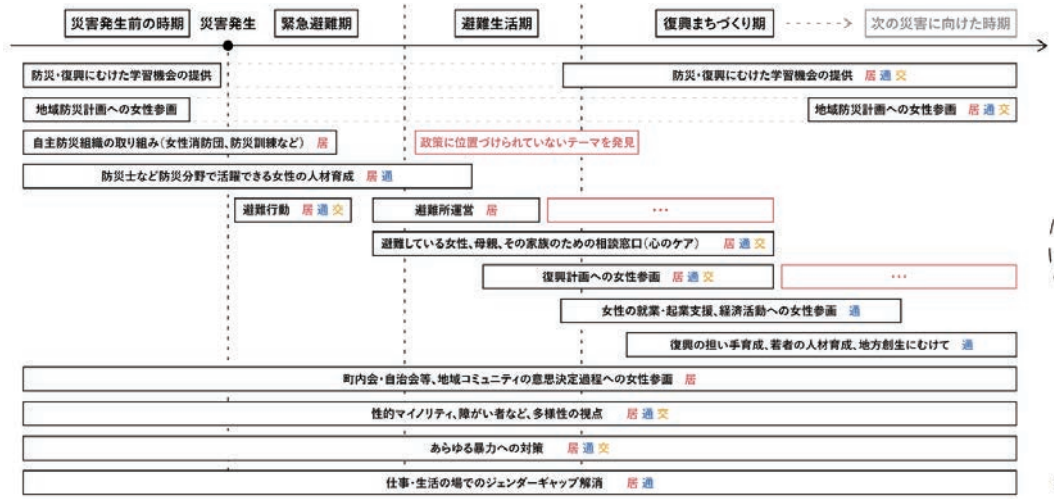
福島原子力被災 12 市町村

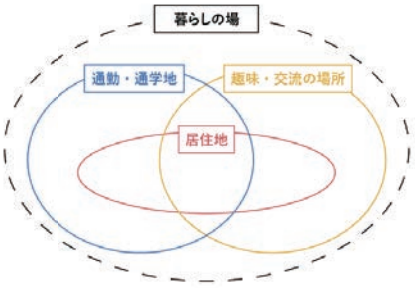
災害過程における「暮らしの場」のジェンダーギャップに関する研究 - 東日本大震災・福島原子力被災 12 市町村の政策および生活実態に基づいて -

M2・洲崎　玉代
すさき　たまよ

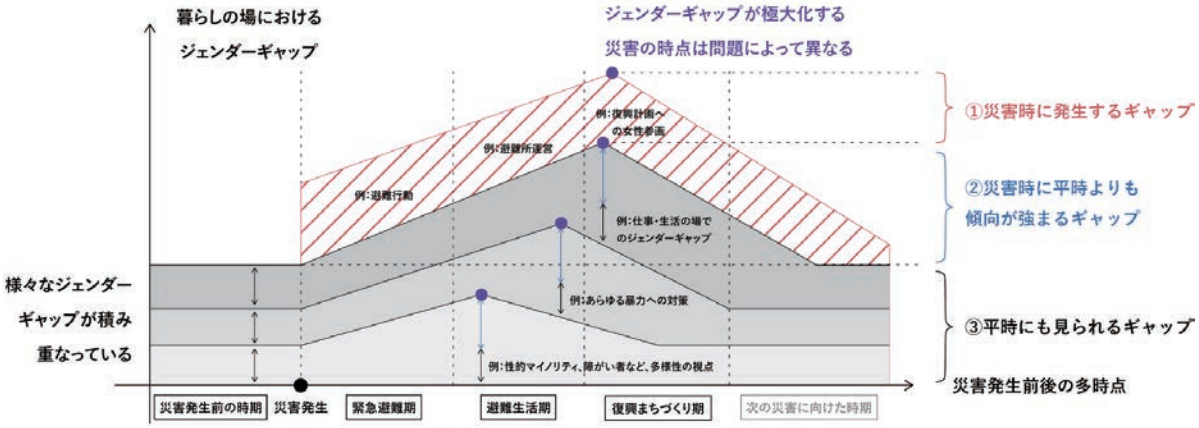
執筆データ

文字数　220 ページ
執筆環境　google docs, indesign
キーワード　災害過程 / ジェンダーギャップ / 東日本大震災 / 福島 12 市町村





図：「災害発生前後の多時点」の「暮らし場」の概念図



図：災害発生前後の多時点におけるジェンダーギャップの様相

研究の概要　ジェンダーは災害に関する諸問題と関連しており、本研究では、福島 12 市町村を対象にジェンダー及び災害復興に関する市町村政策と生活実態の観点から、災害発生前後の多時点における「暮らしの場」のジェンダーギャップの実態を明らかにした。市町村政策の分析からは、災害発生が男女共同参画計画推進に及ぼす悪影響や、国や県のジェンダー政策の災害復興に関する内容反映の不十分、ジェンダー政策と災害復興政策の連携不足が見出された。また、居住地、通勤・通学地、趣味・交流の場所から構成される暮らしの場のヒアリングからは、暮らしの場のジェンダーギャップは存在し、災害時に発生するギャップ・災害時に平時よりも傾向が強まるギャップ・平時にも見られるギャップの積み重なりとして整理できた。さらに、暮らしの場の自己評価は男性の方が高い傾向を示した。「災害発生前後の多時点」と「暮らしの場」は、市町村政策と生活実態の乖離を把握し、ジェンダーギャップを減少させる有用な基準だと示唆される。

テーマ選定背景　学部 1 年生の時、サークルの活動で飯舘村に月 1、2 回の頻度で通っていた。そこでお世話になったお母さんの台所仕事を手伝っていた時に「お父さんたちは生まれ故郷だから帰ってきたがるけど、嫁に来た人たちは放射能怖いし、ここじゃなくってもっていう人もいる。特に子どもをこれから産む若い女の人からしたらね。」という話を聞いたことが全ての原点で、このエピソードが忘れられず、災害とジェンダーをテーマに据えることにした。

苦労した点　災害とジェンダーという大きなテーマへの切り口を見出すのが最初は大変だった。また暮らしの場のヒアリングは、個人の人生を聞くことでもあるため、感情移入しすぎると精神的に厳しいこともあった。

今後の展望　研究を進める中で、これまで知らなかった研究成果や地域の状況、そこに暮らす人々の状況の存在を改めて実感し、これからも知見を広めていきたいと感じた。まずは就職先の福島担当になって定期的に通い続けたい笑

M1 へのアドバイス　研倫理審査はお早めに。ちゃんと寝て食べてお風呂に入りましょう。

メッセージ　中島　直人
都市デザイン研究室 教授

福島の原発事故被災地で、災害多時点での個々人のライフヒストリーを振り返って頂くということは、一人ひとりの心の内に触れる調査でもあって、聴き手の責任もまた重かったと思う。その責任を引き受けた洲崎さんにしか書けない論文を書き上げた、そのことが尊い。また、ジェンダーに関する議論は都市デザイン研究室のこれからの研究や活動にとって大事な新たな視座を与えてくれた。

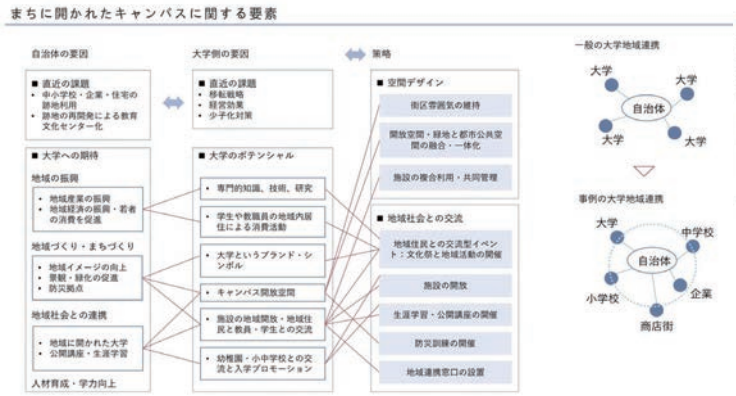
東京都区部

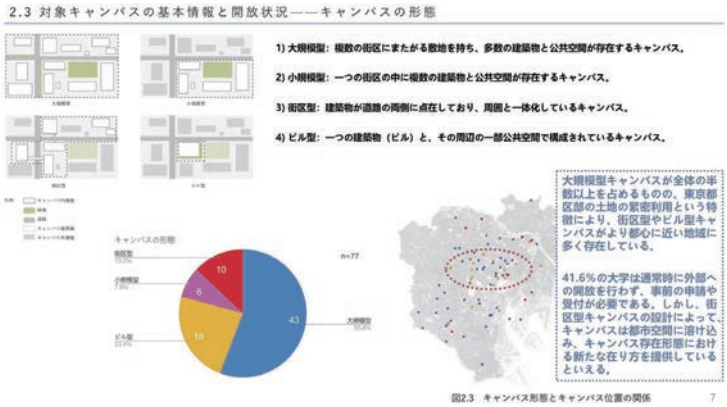
まちに開かれたキャンパスの空間特性・利用実態と地域での役割に関する研究：東京都区部のキャンパスを対象として

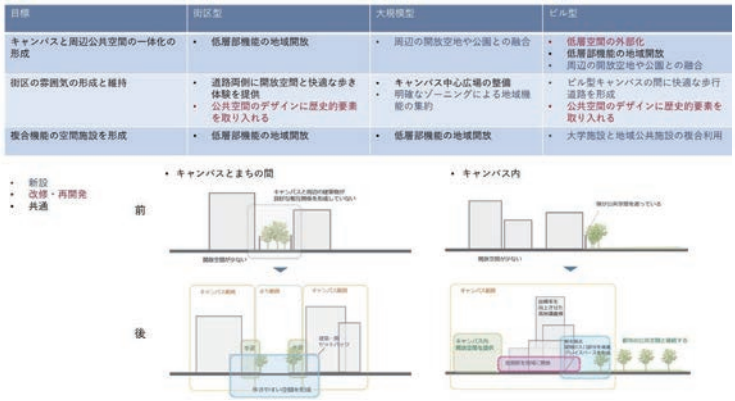
M2・DAI XINYU
ダイ シンユ

執筆データ

文字数	39,938 字（99 ページ）
執筆環境	word
キーワード	大学キャンパス / 開放空間 / 地域連携







目標	街区型	大規模型	ビル型
キャンパスと周辺公共空間の一体化の形成	• 低層部機能の地域開放	• 周辺の開放空地や公園との融合	• 低層空間の外部化 • 低層部機能の地域開放 • 周辺の開放空地や公園との融合
街区の雰囲気の形成と維持	• 道路両側に開放空間と快適な歩き体験を提供 • 公共空間のデザインに歴史的要素を取り入れる	• キャンパス中心広場の整備 • 明確なゾーニングによる地域機能の集約	• ビル型キャンパスの間に快適な歩行道路を形成 • 公共空間のデザインに歴史的要素を取り入れる
複合機能の空間施設を形成	• 低層部機能の地域開放	• 低層部機能の地域開放	• 大学施設と地域公共施設の複合利用

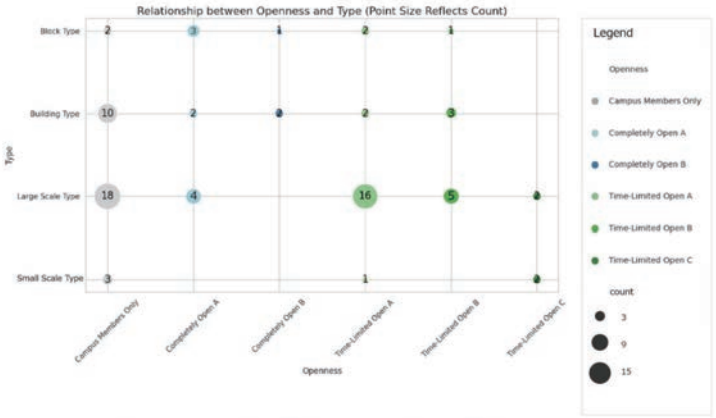


図2.6　キャンパスの開放性レベルと類型の関係

研究の概要　本研究は、東京都区部の大学キャンパスの開放性を評価し、地域社会との持続可能な関係構築の方法を探ることを目的とする。大学キャンパスは都市空間と密接に関わり、そのデザインや公共空間の利用が地域社会に与える影響は大きい。特に、キャンパスの開放性を物理的空間と社会文化的要因の両面から分析し、文献調査、実地調査、ヒアリングの方法を用いて実態を明らかにした。これに基づき、政策的な背景や大学の形態、地域との連携の動向を踏まえ大学が都市部に移転し、公共空間を充実させることで地域の活性化に寄与している様子が示された。特に街区型キャンパスは都市空間との一体感を生み、学外利用者のアクセスを容易にし、キャンパス内の公共空間が意図せぬ滞留や多様な活動を促進する可能性があることも確認された。さらに、具体的な地域事例を通じて大学キャンパスが地域社会に与える影響を考察した。中野区では地域経済の活性化や都市機能の向上が大学の開放性によって進み、足立区では教育資源と住民との連携が地域の社会的価値を高めている。大学キャンパスの開放性が地域再開発や社会文化交流において重要な役割を果たし、持続可能な都市発展に寄与する可能性が示された。

テーマ選定背景　東大のキャンパスに身を置く中で、キャンパスを訪れる多くの校外利用者を見かけ、彼らの行動に興味を持ちました。また、M1 の時にデザイン演習で東京電機大学を訪れ、駅近の都市中心部に存在するキャンパスの形態に強い関心を抱きました。その後、さまざまな機会を通じて他の東京の大学にも足を運び、都市空間との関係を意識しながら、次第に「キャンパスの開放性」をテーマにした研究が自然に形成されました。

苦労した点　大学の数が想像以上に多く、訪問と現地調査に多くの時間を費やしたことです。また、以前は英語で論文を書いていましたが、今回は初めて完全に日本語で書くことになり言語面でも苦労しました。

今後の展望　現地調査を通じて多くの大学の開放性デザインの特徴を理解し、また、ヒアリングを通じて区役所が大学と都市の関係を調整し再開発を進める方法について一定の認識を得ました。今後エリア再開発やキャンパスデザインに活かしていきたいです。

M1 へのアドバイス　早期に最終的な研究内容を急いで決定するのではなく、常に考え直し調整を行うことが重要です。またインタビューや現地調査には十分な時間を確保しっかりとデータを集めることが求められます。論文を書き始める時期は寒くて体調を崩しやすいのでできるだけ早く多くの部分を書き終えるように心がけると良いです。

メッセージ　永野　真義
都市デザイン研究室 助教

日本のキャンパスの様相に関心を持つことは珍しくないとはいえ、その開放レベル、境界の実態、デザイン戦略、アクティビティ、地域連携などかなり多角的なリサーチにチャレンジし、都区部のキャンパスの現在地を明らかにした。“キャンパスは都市デザイン創出の実験場”とも言われている。言語の壁を乗り越え、日本の都市デザインのいまを全方位的に把握してくれた戴さんのこれからの活躍に、期待しています。

東京都目黒区・世田谷区自由が丘駅周辺 商業集積地

駅周辺商業集積地における回遊中の遊歩行動・環境認知・街路環境の関係性 - 自由が丘駅周辺地区での歩行実験に基づいて -

M2・水野 謙吾
みずの けんご

執筆データ

文字数	107,228 文字（162 ページ）
執筆環境	word, powerpoint, illustrator, Arc GIS Pro
キーワード	歩いて楽しい / 商業集積 / 駅周辺市街地

研究の概要　本研究では、歩くことそのものが目的化している状態を「遊歩行動」と定義し、駅周辺商業集積地における目的地間の回遊行動に着目し、①遊歩行動の行動特性、②遊歩行動に影響を与える街路環境とその環境認知の傾向及び両者の関係性 を明らかにすることを目的としました。調査では、回遊経路や店舗等への立ち寄りを自由とした歩行回遊実験と、指定した経路上を歩きながら「歩いていて楽しい」と感じる要素を収集する経路歩行調査を行い、定量的・定性的に分析を行いました。その結果、遊歩行動中に特徴的にみられる行動特性として、立ち寄り場所数の多さ、方向転換及び自由転換（目的地から遠ざかる方向への方向転換）の頻度の高さが確認できました。また、遊歩行動に影響すると考えられる環境認知は 7 種類（嗜好 / 感嘆 / 高揚 / 関心 / 平穏 / 快適 / 審美）に分類でき、街路特性によってその頻度や種類の傾向は変わること、量的に多い要素のみでなく、少ない要素でもその存在が強調されることで認知される場合があることを明らかにしました。

テーマ選定背景　何か目的があってまちを訪れた時に、事前に予定された目的地での行動（飲食や娯楽、体験など）よりも、そこに至るまでのまちの風景や店舗、また人との直接的・間接的な交流など、非計画の体験を楽しむことが多く、まちの印象を構成する重要な体験だと感じていました。特に都市部における都市機能や人の集積度合いが高い駅周辺の商業集積において、人々はどのように回遊し、どのような要素を楽しんでいるのか、明らかにしたいと思ったことがきっかけです。

苦労した点　回遊中に連続的に体験される街路環境を定量化するため、対象地区内を具に調査し、データ化したこと、また分析手法も先行研究がなかったため苦労しました。

今後の展望　今後大規模な都市開発事業に携わりますが、研究で重視した「人中心視点」、「細やかなスケールで変化の多い街路環境」をどのように都市開発に取り込んでいくかを追求し続けたいと思います。

M1 へのアドバイス　あくまで私が大事にしていたことですが…対象地に足繁く通うことを意識していました。調査以外でも積極的に訪れ、そのまちの環境や人を良く見て、触れ合って、生活者や来街者の視点を知ることで、より課題意識がシャープになったり、新たな視点が見出せたり、より充実した研究になるのではないかと思います。
何より、そのまちの知識が深まり、ディープスポットを知ることができ、研究へのモチベーションが高まると思います！

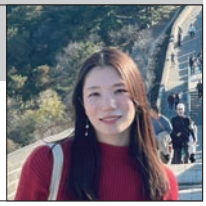
メッセージ　青木　公隆
都市デザイン研究室 特任助教

都市の回遊性は私も魅了されるテーマである。回遊性のある町は多く存在するが、つくろうとすることは非常に難しい。回遊性に魅了される都市デザイナーや都市計画者に示唆を与える研究になったと思う。途中苦しかったと思うが、膨大であり緻密な調査と分析が成果につながった。次は、如何にして回遊性のある町をつくるか、チャレンジしてほしい。

欅の音 terrace（練馬区）・vita passo 楓の樹（練馬区）・
大森ロッヂ（大田区）・hocco（武蔵野市）

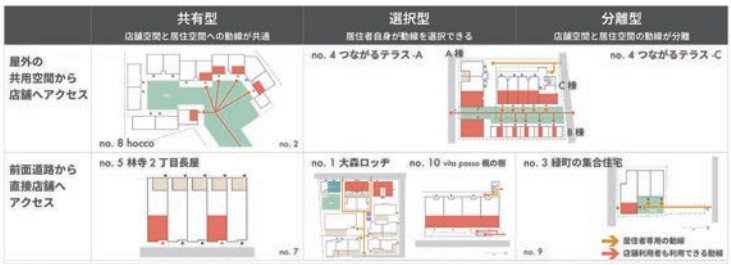
住戸開放型店舗を有する集合住宅の空間・運営・居住に関する研究 - 複数の「住み開き」が計画的に配された事例から -

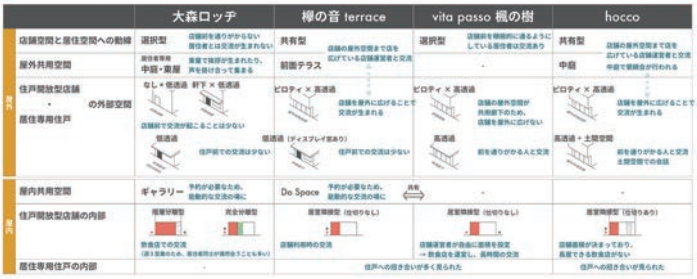
M2・元吉（もとよし） 千遥（ちはる）



執筆データ

文字数	69,880 字（107 ページ）
執筆環境	word, illustrator
キーワード	住み開き / 地域コミュニティ / 集合住宅





研究の概要　住まいと地域との繋がりが希薄化した現代において、住居を地域に開き直す試みの一つとして「住み開き」が挙げられる。これまでその実践の多くが戸建て住宅で行われてきたが、近年では集合住宅に住み開き住戸を配する事例も増えてきている。そこで、本研究では、そのような事例を「住戸開放型店舗を有する集合住宅」と定義し、その実態の把握を目的に調査を行なった。具体的には、空間構成や運営実態、加えて、居住実態として居住者による集合住宅の住みこなしや居住者同士の交流について、図面や文献の調査及び運営主体と居住者へのヒアリングを実施した。その結果、住戸開放型店舗を有する集合住宅の特徴として、運営主体がイベントの実践や入居希望者へのコンセプト説明などを行うなど、居住者の豊かな住みこなしや交流の実現に大きな影響を与えていること、居住者の管理運営への参加など運営主体の移り変わりがあること、また、それらを支える空間として時間的にも空間的にも伸縮性の高い空間設計がなされていることなど、3 者の深い関係が読み取れた。

テーマ選定背景　東京で一人暮らしを始めて、隣に住んでいる人と全く繋がりがないことや、住んでいる地域に全く属している気がしないことに疑問を覚えていました。そんな私みたいな人でも、自らの生業や趣味を周囲の人と共有しながら暮らし、居住者自身にとっても地域住民にとっても居場所となるような住まい方について研究したいと思い、このテーマに辿り着きました。

苦労した点　テーマを決め切るのに苦労しました。もう少し早く決まっていれば、対象地や調査内容についてもう少し詰めることができたのかも… というのが心残りです。

今後の展望　運営方針に余白があることで、豊かな住みこなしが生まれていたので、住まいのあり方が決まりきったパッケージとして居住者に提供するのではなく、一緒に住まい方を考えられるといいなと思いました。

M1 へのアドバイス　普段あまり研究室に顔を出していませんでしたが、最後の 1 ヶ月はほとんど研究室にいました。家に籠もりきりにならずに外に出るだけで気分転換にもなるし、何より同期と些細な悩みごとを相談できたので病まないで修論を書き切ることができました。もし執筆に行き詰まったときは、人に相談してみるのもおすすめです。

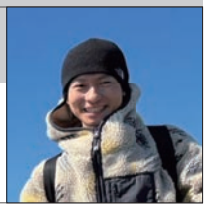
メッセージ　青木　公隆
都市デザイン研究室 特任助教

いまの地域社会に求められているテーマであるし、千住にも住み開きできる集合住宅がほしい、住みたいと思うようになった。何よりも元吉さんのキャラクターがでていてとても素晴らしい。研究によって、その可能性がより明確になったと思う。ぜひとも社会にでたあと、この先進的な事例を、元吉さんのセンスを十分に活かして、自ら生み出して欲しい。

オーストラリア

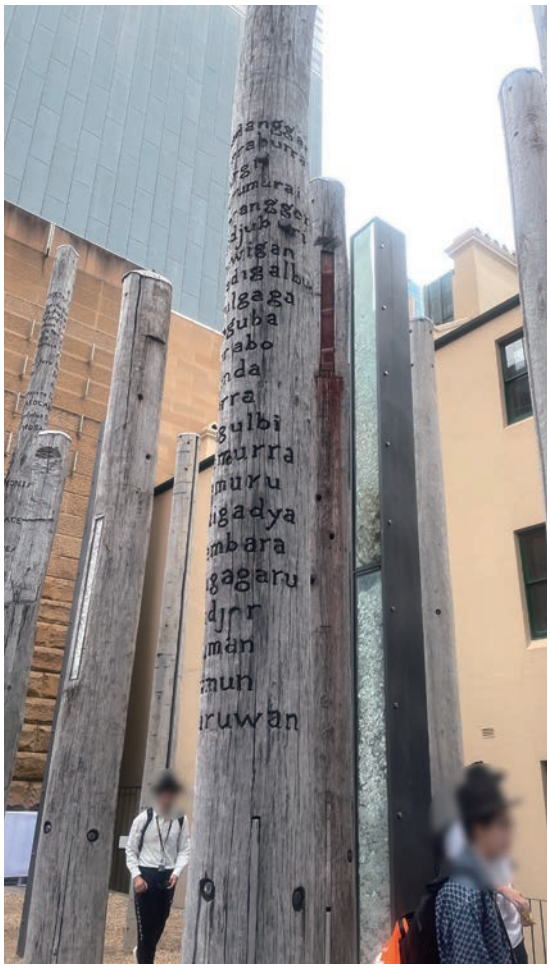
Planning and Programming Heritage Interpretation through Artistic Creation: Case Studies of the Burra Charter and National Heritage Places in Australia

M2・森屋（もりや） 友佑（ゆうすけ）



執筆データ

文字数	25,500 words（130 ページ）
執筆環境	word, indesign, endnote
キーワード	文化遺産保全 / アート作品 / インタープリテーション



研究の概要　オーストラリアは文化遺産保全のリーダーとして、バラ憲章において遺産の価値を伝えるヘリテージ・インタープリテーションの枠組みを確立した。憲章は、遺産を深く理解し計画的に情報を伝える重要性を強調し、国際的に影響を与えている。一方、遺産をテーマとする芸術的創作は、計画的プロセスよりもアーティストの創造性に委ねられる傾向がある。本研究では、オーストラリアの国家遺産 122 か所を対象に、芸術的創作によるインタープリテーションの計画・実施状況を分析し、バラ憲章のプロセスとのギャップを検証した。その結果、芸術的創作は管理計画でほとんど言及されず、既存の解釈ツールとは異なる取り扱いを受けていることが明らかになった。また、事例調査では、アーティストが独自のテーマ選定を行い、新たな視点をもたらしていることが確認された。
バラ憲章は、芸術的創作のプロセスの違いに言及することが求められる。そして、遺産管理組織とアーティストの適切な関与バランスが、創造性と信頼性を両立させる鍵となる。

テーマ選定背景　バラ憲章に記されたコンセプトに魅了されたことがきっかけです。世界の文化遺産保全は、記念碑的な有形文化財を守る運動から始まりましたが、バラ憲章は保全の対象を "Place" とし、無形の価値も含めたセンスオブプレイスを守ることを第一の理念と掲げています。これは無形の価値を場に蓄えてきた日本にとっても、大いに学ぶところのあるドキュメントだと思います。その無形の価値を伝える現代アートの制作過程に興味をもって、このテーマを選びました。

苦労した点　日本にオーストラリアのことを伝える内容とするだけではなく、オーストラリアの文化遺産保全の分野においても新規性のあるテーマを見つけることに苦労しました。

今後の展望　生煮えの学びで、何かに生かせそうな気はしませんが、他国における同様の取り組みにも目を向けて、クリティカルな遺産の解釈とは何か、今後も追及していきたいです。

M1 へのアドバイス　自分で研究のテーマを選ぶことは苦しさを伴いますが、自分ならではのテーマを見つけるには、行動あるのみです！苦しさを乗り越えた先には大きな達成感が待っています！

メッセージ　**中島　直人**
都市デザイン研究室 教授

卒業設計での埋蔵遺跡から始まり、ルンビニを経由して最終的にたどり着いた「芸術的創作によるヘリテージ・インタープリテーション」というテーマ、問題意識には、20 代前半の森屋君の歩みが強く刻まれている、何よりもその点を評価したい。オーストラリアでの武者修行、英語での論文執筆を終えて、次はその成果を国内外に広く発信していってほしい。

沖縄県沖縄市中央パークアベニュー

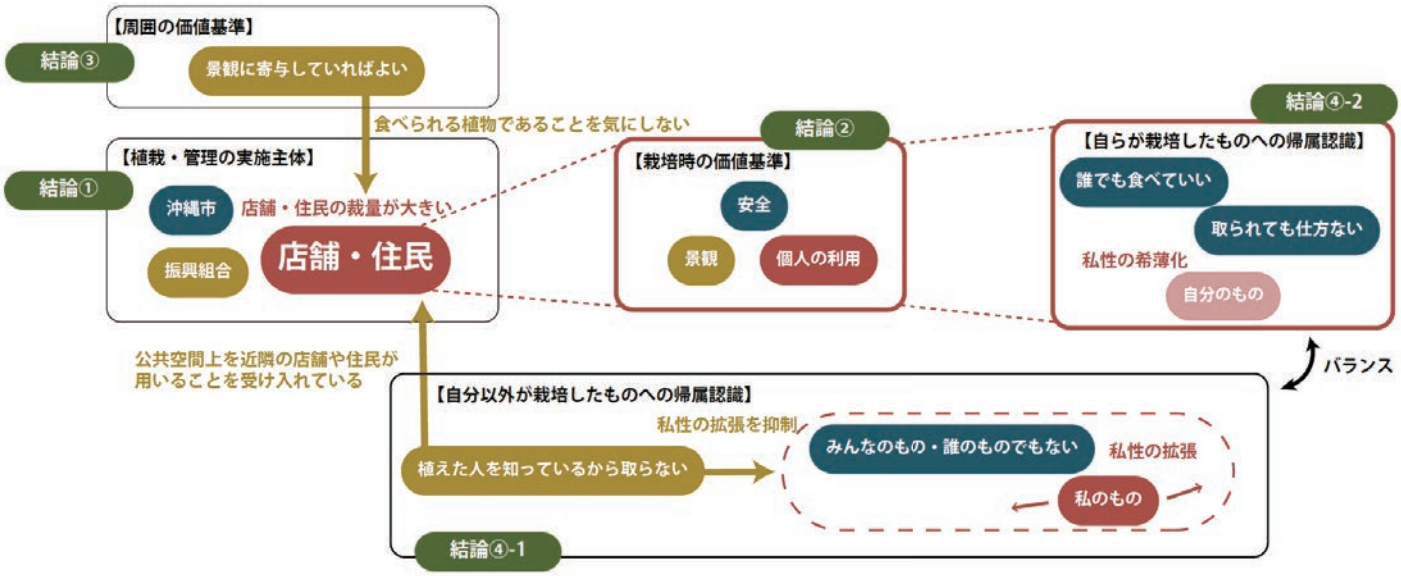
商店街の歩道空間に形成されたエディブル・ランドスケープにおける公・共・私の混成実態 - 沖縄市中央パークアベニューの「食べられる植物」を対象として -

M2・山田 真帆（やまだ まほ）

執筆データ

文字数	62,598 文字（121 ページ）
執筆環境	word
キーワード	エディブル・ランドスケープ / 公共空間の私的利用 / 商店街 / インフォーマル

食べられる植物に関わる主体・価値基準・帰属認識における公・共・私の関係性



研究の概要　公共空間における私的行為の中でも、食べられる植物の栽培は公共の利益に反するとして理解を得難い。本研究では、公共空間上に個人の私的行為によって形成された非計画的なエディブル・ランドスケープを対象とし、その私性・公共性の混成実態を解明し、共存の条件を探ることを目的とする。沖縄市の商店街・中央パークアベニューを調査対象地とし、栽培行為の主体、栽培時および他者への栽培活動への価値基準、帰属認識を公・共・私の視点から分析した。現地調査と商店街店舗へのインタビューにより、(1) 個人の栽培行為の自由度が大きい、(2) 栽培者は公・共的配慮をする、(3) 他者の栽培行為は景観の価値基準で評価される、(4) 収穫行為には栽培主体の存在が影響する、(5) 栽培植物に対する所有意識が希薄であることが明らかとなった。このような公共・私性の混在する状況では、立地・空間・管理者の特性が私的行為の実施主体と私的行為の周辺に対して作用すること、地域共通の価値観の存在が重要であることが示唆された。

テーマ選定背景　自身の出自や多様な集団での経験から、メインストリームにないものが見落とされているのではないかという問題意識を持つようになった。都市デザインの研究として、都市計画に対抗するインフォーマルな行為に着目し、それが受容される場所に包摂性のあるデザインの手がかりを探ることを目指した。特に人間の生に関わる行為を重視し、「食べる」行為に行き着いた。その結果、奇しくも卒業制作と同じエディブル・ランドスケープを扱うこととなった。

苦労した点　対象地の魅力や面白さを伝えきれなかったのではないかというのが一番の心残り。開発により景観が大きく変わることが決まっている中央パークアベニューのアーカイブにできたら、なんて思っていたが、難しかった。

今後の展望　修士研究の思考回路は、修士期間の PJ や進路選択の判断軸と重なる部分が大きかった。ある程度時間をかけて形成した修士 2 年時点の価値観として、社会人でも立ち返るものになると思うし、立ち返りたい。

M1 へのアドバイス

抽象的なアドバイス：頭でっかちにならず現地で足を動かすことも大事だし、たくさん動いて得たことに対してじっくり手と頭を使って整理することも大事。（特に卒業設計しか経験がない場合）修論と聞いて構えてしまうが、行き来を繰り返すその進め方は、設計と変わらないのかもしれないと思う。

具体的なアドバイス：倫理審査は早めに出した方がいい。

メッセージ　永野　真義

都市デザイン研究室 助教

生業（なりわい）はもともと「なりわざ」と読み、作物を実らせる技術を語源とする。沿道の人々が作物を実らせあう商店街を見た山田さんは「！？」と思ったそうだが、それは単純に面白い・物珍しいとかでなく、ささやかな実践の中にあるみんなで生る／生きるという根源的な「わざ」を探る必要があるという、ある種の切実さが伴っていたように思う。楽しさと切実さが融合した、山田さんらしい論文になった。

東京都杉並区北部

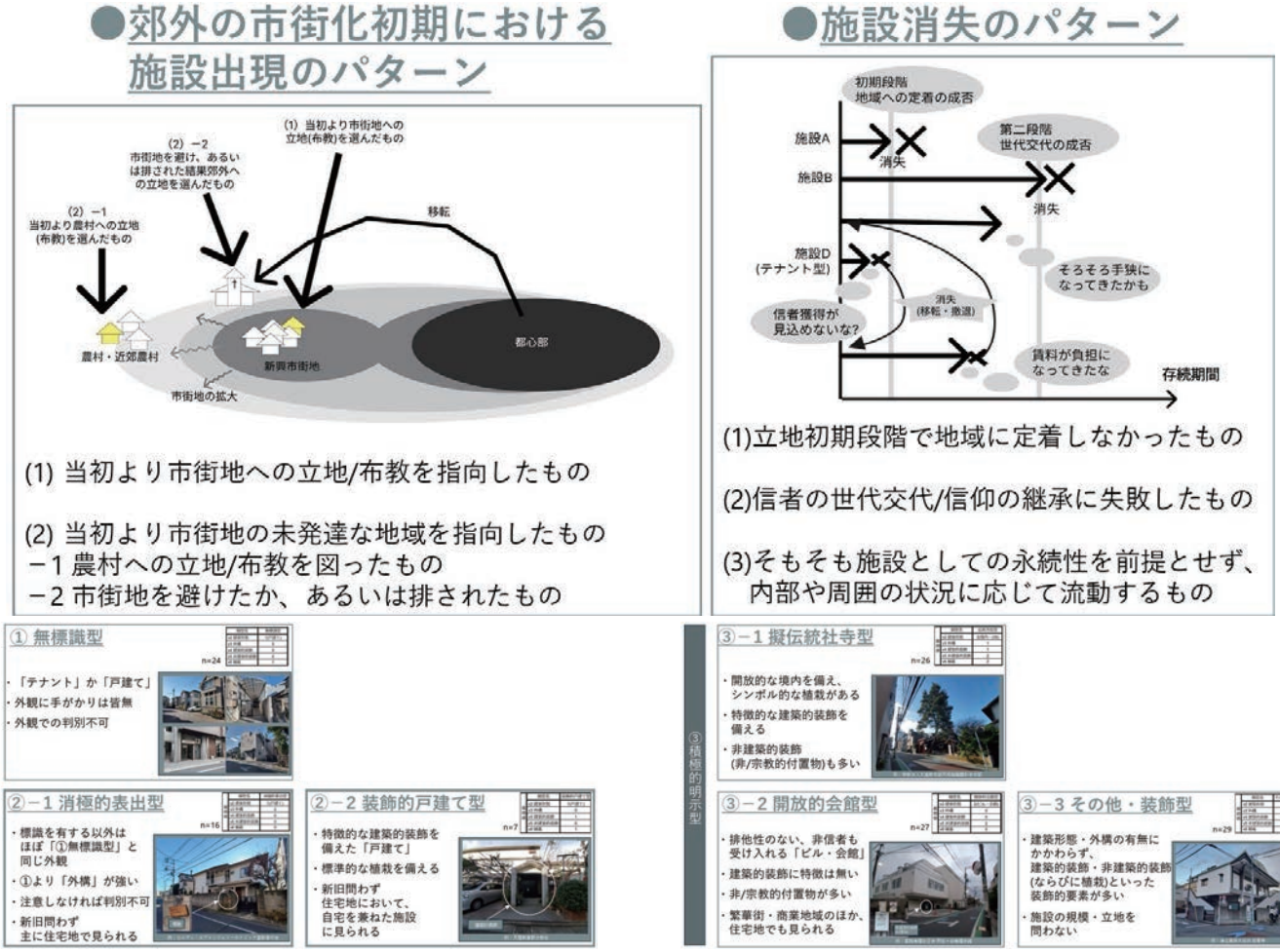
東京郊外における非伝統的宗教施設の「あらわれ」について

- 大正期以降杉並を事例として -

B4・浅海　瑞貴
あさみ　みずき

執筆データ

文字数	5 万字弱（60 ページ）
執筆環境	word
キーワード	非伝統的宗教施設 / 郊外 / 立地過程 / 施設形態



研究の概要　東京郊外の非伝統的宗教施設の顕われにくさを、それらが①大正期以降どう出現してきたか（立地過程）②どう表出しているか（形態）の二側面から捉えた研究。地図と電話帳を併用して・宗旨 / 建築的価値等にかかわらず施設を網羅的に扱ったことに、特に独自性がある。① GIS へのプロットから施設が市街地の変動に応じた出現・消失を見せること、交通施設への近接と既成市街地内を好む点で伝統社寺とも異なる立地選好をとることなどが分かった。また市街化初期の出現と全時期共通の消失のパタンを考察した。②外形の記号的分析から「無標識型」「消極的明示型」「積極的明示型」のもとで 6 類型を取り出した。表出は周囲の条件に強い影響を受け、また極度に顕われないもの・周囲に溶け込みつつ小さな差異を備えるもの・顕在化を進行させるものという 3 つの方向性がある。　以上の検討から特有の論理に基づくというよりは、それが結果的にであれ、市街地や土地利用への適応を基本としておりそれゆえに顕われにくくなっていると言える。

テーマ選定背景　①卒論会議の朝、読んでいた本から着想。希求された永続的な愛情共同体（宗教）の空間的実体としての施設が、都市形成との関係でどのように / な論理で振る舞ってきたかという興味。
②「郊外は均質な空間だ」とする語りへの反発。時たま「勧誘」がやってきたり、バス停に機関誌がぶら下がっていたり、通学路にも息づく宗教の存在と①から、実は住人個々にとっての聖なる場所や次元が幾重にも交差している空間として描き出せるのではと。など

苦労した点　①資料やデータ、文書の管理がへた：紙媒体と電子媒体の往復で、文献や自分が書いたメモを見失ったり忘れたり。
②作業の優先順位を設定していない（なんとなく）：最後まで与件整理に労力を割くことに。

今後の展望　①→目録を作る。それと管理上融通が利くのは電子だが紙を使いたい、皆さんはどう使い分け / 管理してますか ???
②→はじめに研究の全体像を見定めておく、とか。エクセルと仲良くなろうよという結論。

研究の推しポイント
先述の研究の位置づけとして、従来研究を踏まえつつ空白領域を突けたのでは。施設立地・形態にかんする資料の収集はがんばった。
滑り込みで形態論が付け加わったことで、施設の「あらわれ」（見えにくさ）という問いへの応答は収まりが良くなったかもしれない。

メッセージ　　中島　直人
都市デザイン研究室 教授

卒論は「これから自分は都市に対してどう向き合うのか」についての意思表明である。浅見さんの論文は、ニッチな非伝統的宗教施設の立地や形態の分析という地味な体をとりつつも、その実は都市を生きる人々のある種の社会心理を土台にして都市計画や都市史をラディカルに更新していきたというスピリッツに満ちている。ここが出発点、この先にはたくさんの可能性がある。

東京都市圏

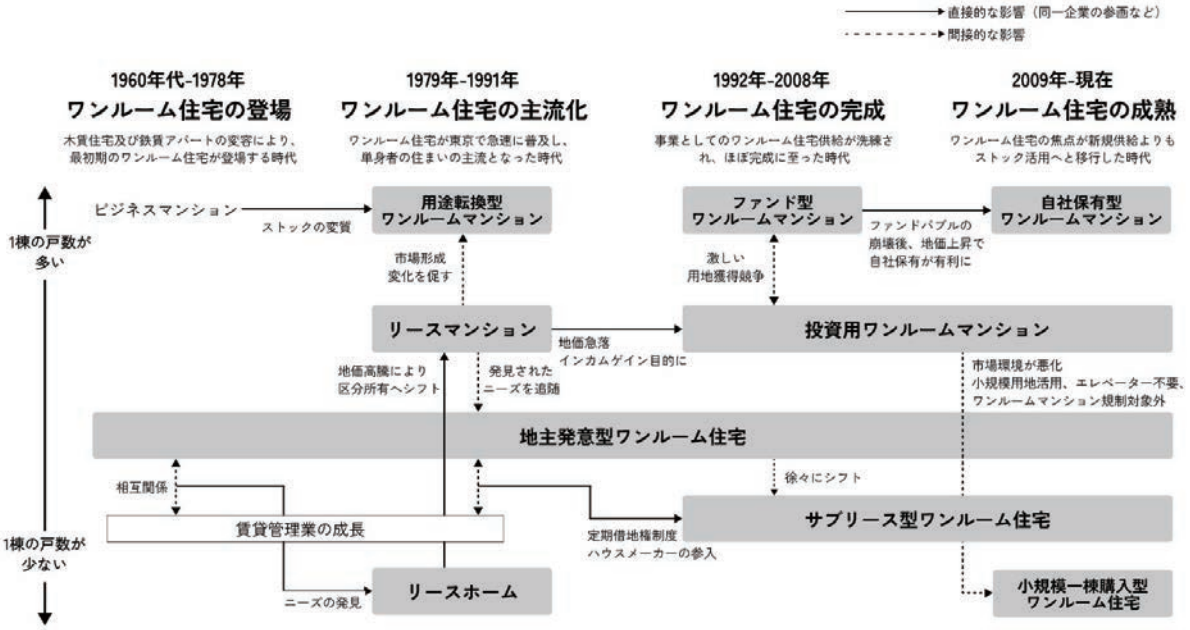
ワンルーム住宅の都市史

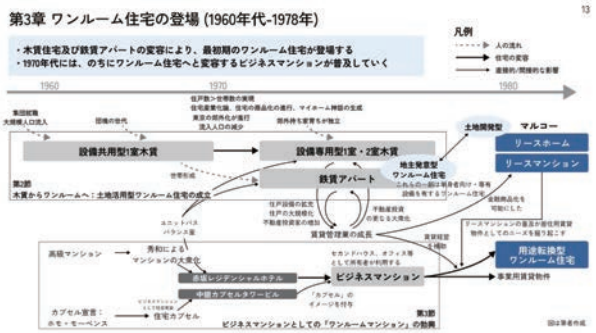
- 不動産投資が育んだ匿名的住まいと東京の都市形成 -

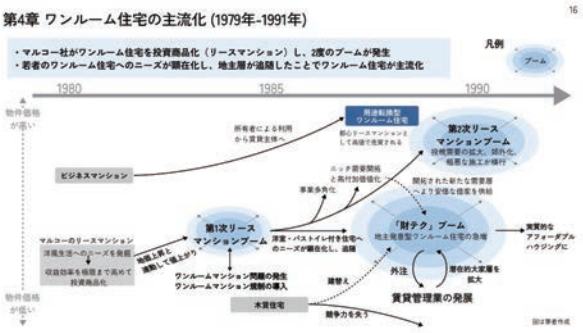
B4・髙野　広海（たかの　ひろうみ）

執筆データ

文字数	169,897 文字（164 ページ）
執筆環境	google docs, figma
キーワード	ワンルーム / 単身者 / ひとり暮らし / 住宅の商品化







研究の概要　本論文は、共同性 / 協同性を前提としてきた単身者向け借家が、住宅の金融商品化によってどのように変容し、現在のワンルーム住宅（＝匿名的生活を可能にする単身者向け狭小借家）ストックが形成されてきたかを明らかにすること、及び東京の都市形成との関係性を示すことを目的としている。ワンルーム住宅を 9 つの類型に整理し、ワンルーム住宅の登場・主流化・完成・成熟という 4 つの時代区分ごとにその展開を示した。その結果、ワンルーム住宅は単身者向け借家が政策的な位置づけをなされなかったがゆえに、民間企業がその持続的な供給システムを探求し、最適化した結果として形成されたものであることが示された。また、ワンルーム住宅は地域社会との摩擦や単身者の孤立といった課題を抱えながらも、アフォーダブルな都市住宅を提供しつつ、単身者の多様なニーズに対応する役割も果たしてきた。単身者・地域社会双方が脆弱化していく将来に向けて、本研究が単身者の住まいに関する議論の土台となることが期待される。

テーマ選定背景　大学 2 年次から大学至近・家賃激安のシェアハウスで暮らし、そこでの出会いに大きく影響を受けてきたことで、ワンルームでのひとり暮らしがもったいないのではないかと感じた。またイギリスでの留学中にフラットシェアで暮らす友人達を見て、専有設備が揃った狭小住戸で若者が 1 人暮らしをするのは当たり前ではないことを知った。なぜこのような状況が生じているのか、その経緯を知りたいと思った。

苦労した点

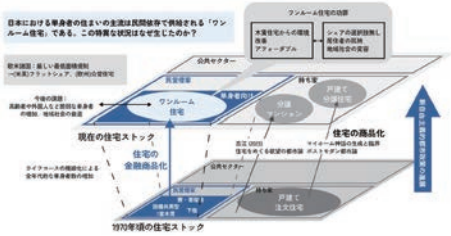
都市史として位置づけられなかったこと。今後に向けての示唆をうまく導けなかったこと。

今後の展望

大学近辺の一戸建てのうち、相続などであまり使われていない物件をシェアハウス化していく活動をしているので、その事業に生かしていきたい。

研究の推しポイント

風呂敷を広げられたこと、とにかく長いこと、ダイヤグラムがかわいいこと。



メッセージ　中島　直人

都市デザイン研究室 教授

ワンルーム住宅に対する愛憎が立体的な歴史叙述を生み出した。よくこれだけの資料を集めて、一つの論に仕立て上げたものだと感心している。当初より「一冊の本」を書くかのような広い視野と強い情熱が感じられて、こちらもいつからか「小さな論文」にまとめてなんか欲しくないと思うようになっていた。結果、200 頁に迫ろうかというボリュームの卒論が出来上がった。これでよかったと思う。

岡山県備前市三石

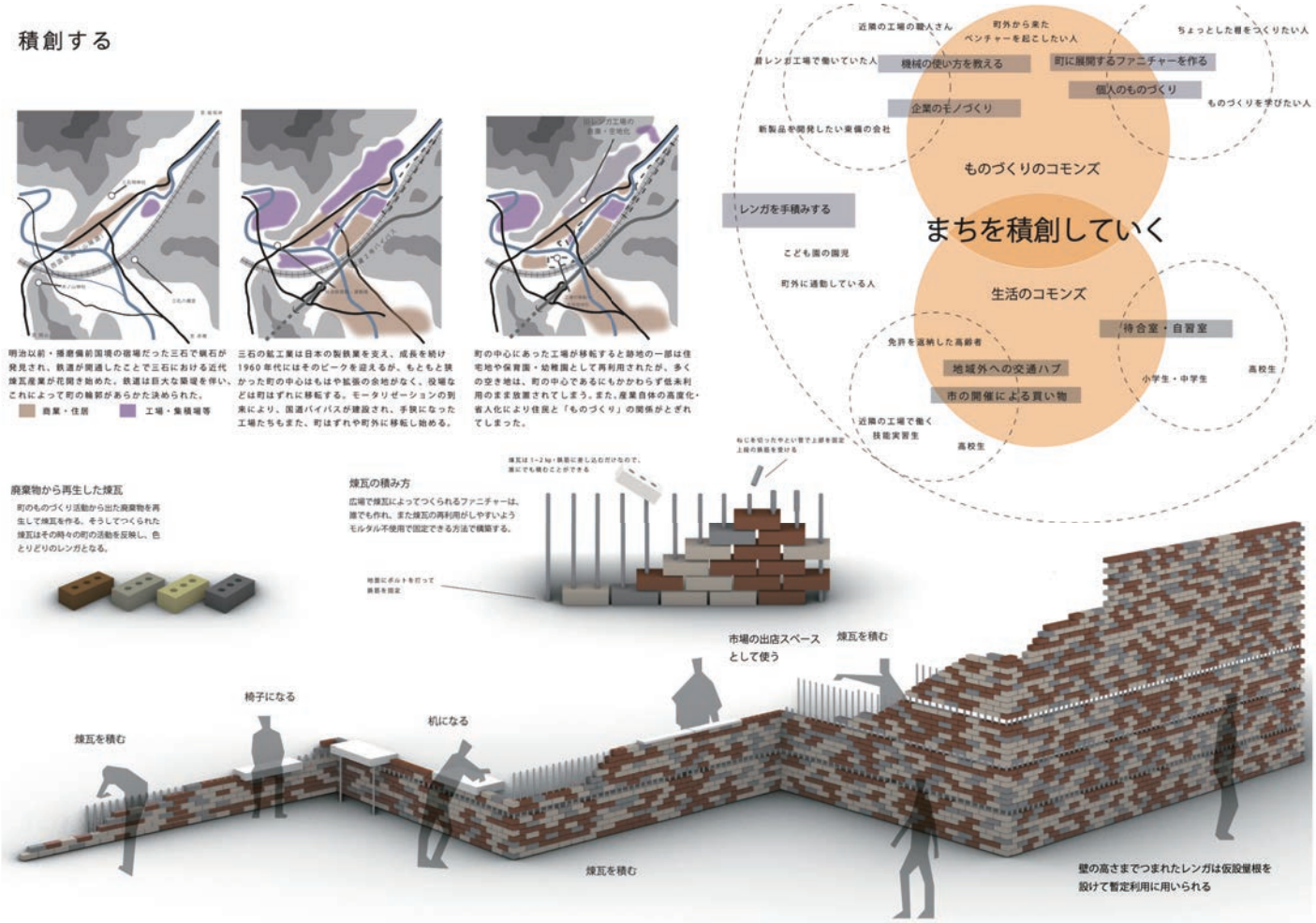
煉瓦積造創の町

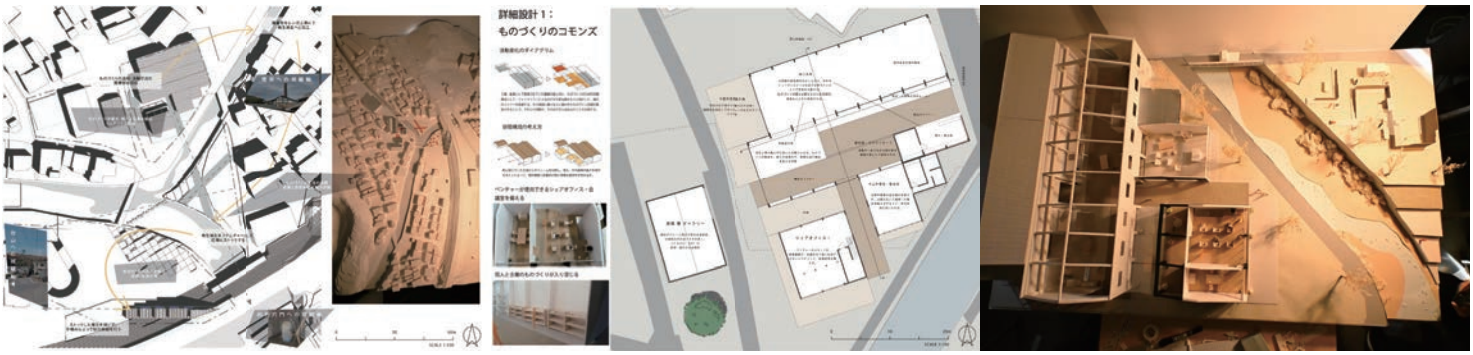
- 岡山・三石を再生する次世代ものづくりコモンズ -

B4・石井 聡太（いしい そうた）

制作データ

作品総数	模型 1/50, 1/500, A1 パネル 8 枚
制作環境	rhinocerus, archicad, illustrator
ヘルパー	6 名 + α





設計の概要　地場産業・製造業の衰退と跡地の低未利用化という問題意識から耐火レンガ産業が栄えた三石を選んだ。対象地は町の中心に位置し、合流する川により 3 分割された場所である。1 つ目の敷地では既存工場を分節し地域に開かれたものづくりのコモンズとして、2 つ目の敷地はそこから生まれる廃材でレンガを用い人々によってファニチャーなどが手積みされる広場、3 つ目の敷地では広場に蓄えられた煉瓦を用いて町はずれにある駅を移設するということを提案した。

苦労した点　計画を 3 敷地に広げる中できちんと詳細設計が行えたのが 1 敷地のみであったということ。また、考えてきたことをうまくつなげられるようなストーリーにまとめ上げ表現しきれなかったことが心残りです。

得た学び　スケジュール管理・体調管理の重要性とこだわるのはほどほどにすること。全体の完成形を見据えずに、楽しい作業を優先していって細かいところにこだわっていると後で大変な目に合います。

メッセージ　青木　公隆

都市デザイン研究室 特任助教

建築資材の組み立て方が都市や街のスケール、そして街の未来へどのように接続するか、という壮大なテーマであった。私も非常に関心があるが、難題である。建築資材という固定化され動かないものを起点にどのように街をつくるか、未来を創造するかこれからもチャレンジしてほしい。都市と資材を横断する思考を鍛えてほしいし、できると思う。

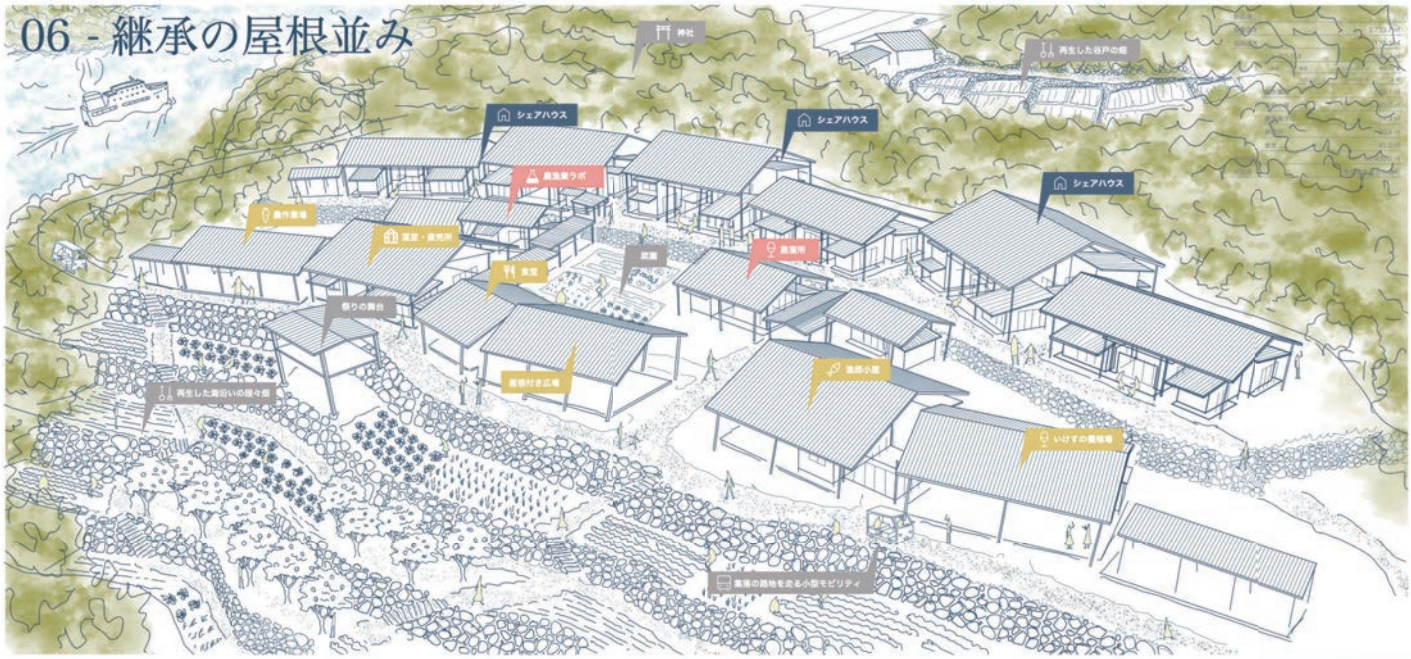
香川県坂出市与島

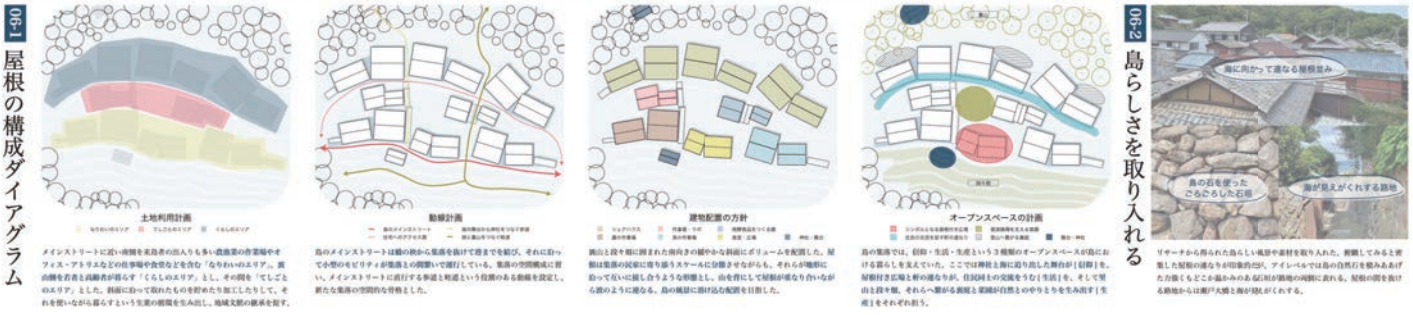
重なる屋根は、暮らしを継ぐ - 瀬戸内海・塩飽諸島を対象とした地域文脈の継承のためのバトンタッチ移住とその拠点の提案 -

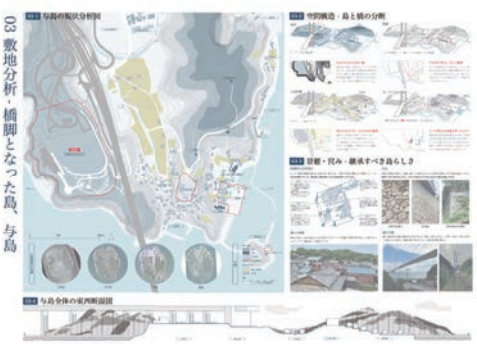
B4・岡田 耀（おかだ ようと）

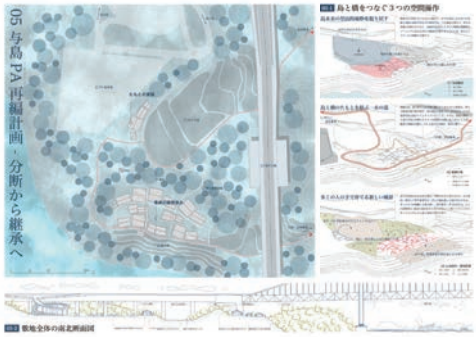
制作データ

作品総数	模型 1/100, 1/500（2 点），A1 パネル 8 枚
制作環境	ArchiCAD, illustrator, fresco, QGIS
ヘルパー	2 名









設計の概要　瀬戸内海には、多島海の自然と人々の営みが織りなす独特の文化的景観が形成されている。しかし、近代化に伴う大規模開発と現在の人口減少により、この地域固有の文脈は失われ、見えにくくなっている。そこで、都市部の若者と島々の過疎集落に暮らす高齢者が一定期間共に生活しながら地域文脈を継承する「バトンタッチ移住」を提案する。与島を橋脚の一つとして架けられた瀬戸大橋の PA を舞台として、新たな出会いや地域文脈の次世代への継承が行われる。

苦労した点　まっさらで広大な PA をどのように再編するか、手がかりを見つけられず、プログラムや提案の方向性を決めるのに苦心した。そして時間が足りなくなり、詳細設計はスタディ不足になってしまったことが残念だった。

得た学び　卒業設計を通して自分が如何に一人では何もできないか、痛いほど感じた。今後は自分の強みを活かしながらも、多くの人の力を借りたり、協力し合ったりしながら色々なことに挑戦してみようと思った。

メッセージ　**青木　公隆**
都市デザイン研究室 特任助教

私が知る限り、卒業設計に限らず、岡田君が取り組んだ設計には、新しい建築や仕組みが必要とされる確かなコンセプトが常に存在していた気がする。これからも大切にしてほしい。バトンタッチ移住という提案は、人口減少化にある多くの地域に未来への希望を与えるものだった。これからも岡田君らしい調査を通じた都市・建築の構想を期待している。

長野県松本市

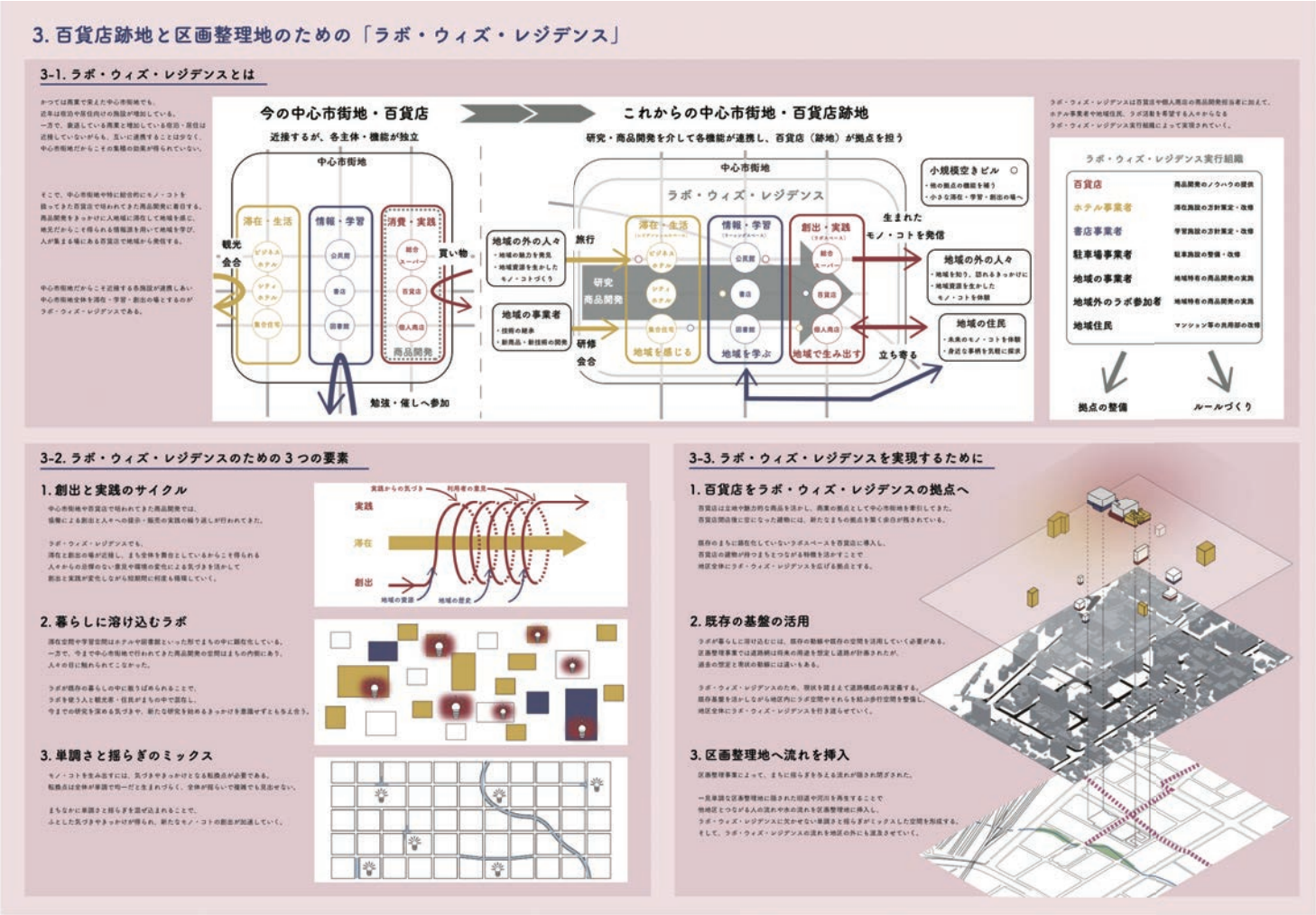
商泊住を繋げる「ラボ・ウィズ・レジデンス」の網

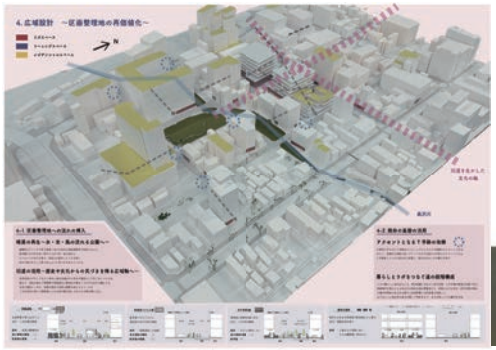
- 商都松本における百貨店跡地の再生を起点とした区画整理地の再価値化 -

B4・田代 智哉（たしろ ともや）

制作データ

作品総数	模型 1/100, 1/500, A1 パネル 9 枚
制作環境	archicad, illustrator
ヘルパー	20 名（数時間だけも含む）





設計の概要　百貨店が好きなこともあり、近年の地方都市の課題である百貨店跡地の再生とそれを支える市街地の更新をテーマにした。百貨店で行われてきた商品開発に着目し、県内外の人が周辺の宿泊施設に一定期間滞在しながら、地区全体を活用し研究・開発を行う仕組み「ラボ・ウィズ・レジデンス」を提案した。その拠点となる百貨店跡地は周辺建物と一体的に活用しつつ、メインの既存建物を部分活用し、棚や庇を用いた可変な空間で建物内外に学びや創出活動が広がる場とした。

苦労した点　12 月ごろまで全く浮かばなかったコンセプト、地区全体のデザイン手法を決めるのに苦労した。決めるのが遅かった分、中での人の活動の様子やプレボ・模型の見せ方にあまり時間を割けなかったのが心残り。

得た学び　人の助けを得られることの有難さを痛感した。助けられるだけでなく今後は自分も一層助ける側になりたい。また、プレボや模型制作で人に伝えることの難しさも学んだので、考えを伝える術も磨いていきたい。

メッセージ　永野　真義
都市デザイン研究室 助教

昨年度修了の高野さんの百貨店修論があっただけに、本人はそうでなくとも研究室としてのつながり、見えないリレーを感じざるを得ない制作テーマで私たちも前のめりの卒論会議であった。百貨店を点と面のあいだのような存在と捉え、「ラボウィズレジデンス」というプログラムを通して、アーバンデザインに肉薄してくれた。何らかの形での続編（あるいはリレー？）を、ぜひ修士にて。

長崎県長崎市

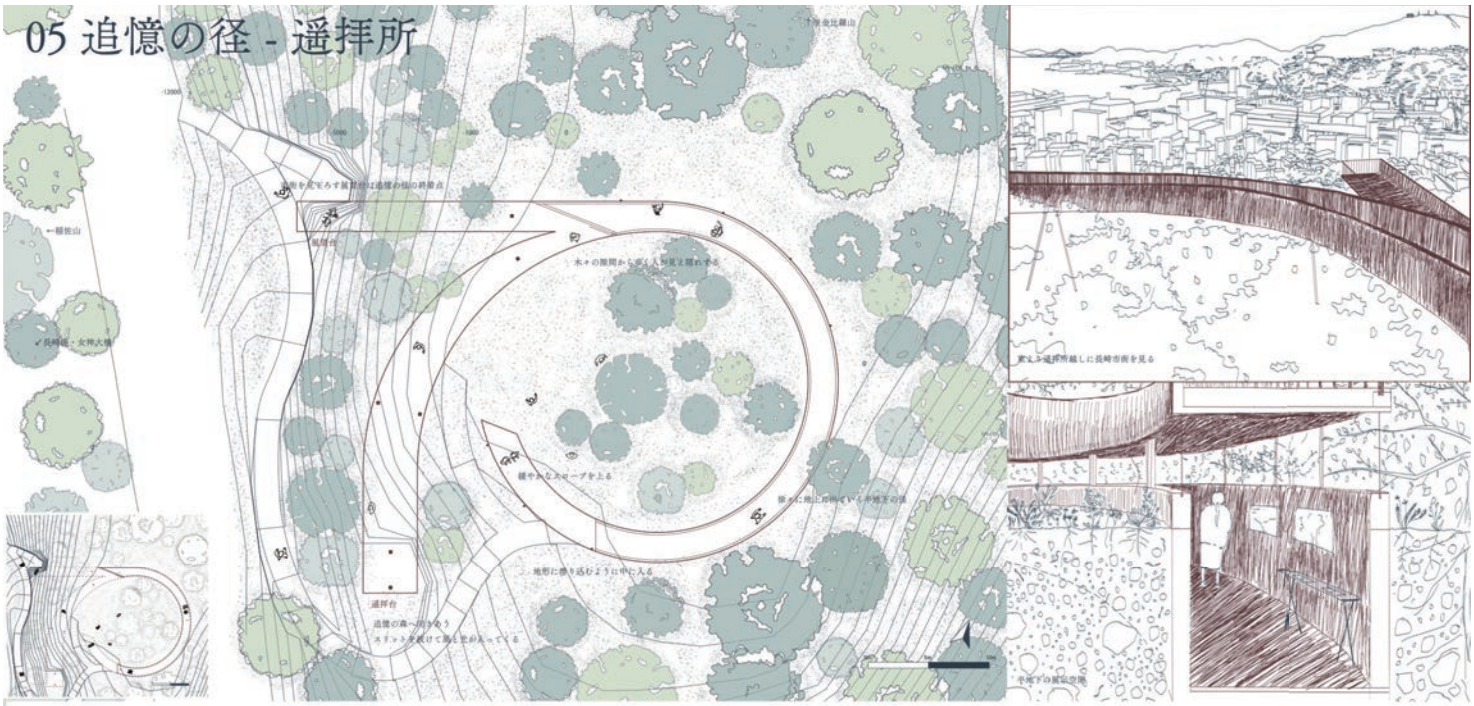
追憶の丘

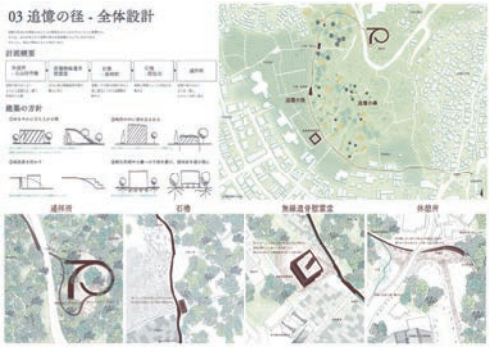
- 長崎斜面墓地における、原爆無縁遺骨の弔いから始まる追憶の径の形成 -

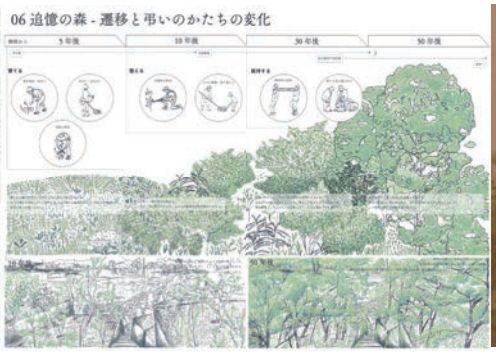
B4・長野（ながの） 初海（はつみ）

制作データ

作品総数	模型 1/100, 1/1000, A1 パネル 8 枚
制作環境	illustrator, fresco, QGIS
ヘルパー	5 名







設計の概要　江戸時代からの斜面墓地である立山において、80 年の間仮安置状態にある原爆無縁遺骨を適切に弔う、墓じまいの増加で生じる問題に対処するという 2 つのテーマを掲げた。追憶の丘・立山は、丘を登りながら無縁遺骨を弔うと共に長崎の復興のみちのりを追体験する“追憶の径”と墓じまいに紐づく播種により形成する里山型合葬樹林墓地“追憶の森”から成る。径が後世にわたって丘の記憶を伝えながらも、丘自体は丁寧に森に還される、立山の丘に対する弔いでもある。

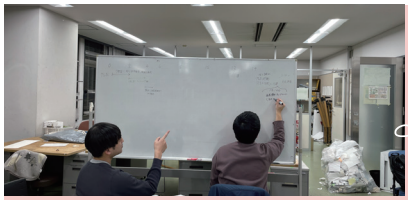
苦労した点　テーマは都市の縮退や死生観等と初期から決まっていたものの、そこから対象地や設計内容の決定に繋げるまでに時間がかかった。最終的に対象地とコンセプトがうまく噛み合った一方で詳細設計は不足している。

得た学び　自分の未熟さと共に演習等で複数人で協力できたことの有難さを実感した。今後グループワークではより個々の強みを活かせるような目指しつつ、自信を持って自分の強みだと言えるものを作り上げていきたい。

メッセージ　**永野　真義**
都市デザイン研究室 助教

本当に希求したいことを考えること。平和な日本を生きる私たちが、忘れてしまっていること。そうしたことは意識的に自分たちに問いかけ続けなくてはいけません。「アートで終わらず、真に役に立つ提案にしたい」という点に拘ってくれたことがとても良かった。日本被団協がノーベル平和賞を受賞したタイミングで、大切なメッセージと想像力を都市工に届けてくれる作品になりました。

MEMORIES



徹夜することになった最終日に、同期に助けてもらいながら（怒られながら）タイムスケジュールを組んだ。（B4 田代）

発表前日に浅見がみんなのモケシャを撮ってくれました。たくさんの人が撮影に協力してくれて、無事キービジュアルが撮影できました。（B4 岡田）

卒制を経て、B4 同士で仲良くなった。お互いの個性を尊敬しつつなんとなく連帯感が生まれたような気がします。（B4 長野）

B4

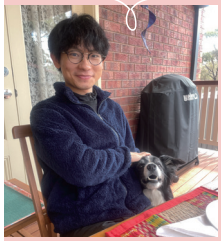
IN THE LAB

他の M2 が朝から夜までモニターと向き合っている姿を見て、自分も頑張らなきゃと思わされました…お互いに励まし合って乗り切ることができました。提出後に同期と研究室で打ち上げをしたのもいい思い出です！（M2 小林）

机の上に置いた日めくりカレンダーをめくることが、毎日研究室に来る小さな楽しみになっていた。（M2 山田）

AT THE FIELD

オーストラリアでは、たくさんの現地の方に助けていただいて、充実した日々を過ごしました。（M2 森屋）



集合住宅の居住者さんへのヒアリングは、イベントに合わせて行うことも多く、お手伝いもさせてもらいました。これまでのプロジェクトでの社会実験準備が存分に生かされました！（M2 元吉）

駅から少し離れた場所にある浄真寺の紅葉。研究に行き詰ったらよくお参りにきていました。（M2 水野）

COLUMN

WEB MAGAZINE

続きはコチラ >>>
https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

大雪のみなかみ

みなかみプロジェクト

M2 の学生は今回が最後の出張でした。M2 を中心として今年度のまとめとなるコンセプトペーパーの作成を、他のメンバーは 5 月に開催するイベントに向け旧社員寮の壁の塗装を行いました。今回の出張は大雪と重なり、スニーカーはずぶ濡れになりましたが、冬の水上らしい風景を楽しむことができました。（B4 石井）

MACHI BINGO

マガジン片手に、まちを歩こう

上野駅

今年の卒業制作は駅を題材にしたものが多かった。ということで、今回は「上野駅」でまちビンゴを行うことに。迷路のような駅の中、どこを歩いているのかわからなくなりそうになりながら、たまには目的なく駅を歩くのも楽しいかもしれないと思った。(M1 木村)

2 月号担当
M1 星 葵衣

論文・制作提出が終わった 2 月、研究室には人が少なく少し寂しい雰囲気です。笑 先輩方や後輩の皆さんの集大成を（ざっとではありますが）まとめることができ、良い特集になったのではないかなと思います！春休み中にも関わらず重めのアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。来年度は我が身、同期と励まし合いながら頑張りたいです。

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE | vol.355

発行：東京大学都市デザイン研究室マガジン編集部
山田真帆・音山尚大・小林夏月・洲崎玉代・水野謙吾・元吉千遥・東條秀祐
木村千咲・星葵衣・松本望実・和栗千明姫・王思宇

発行日：2025 年 2 月 28 日